

2年人文研究日本史G講座休業中課題①

2年 組 番 氏名

○以下の文章の空欄に入る適切な語句を答えなさい。

人類は地質学上でいう第四紀で大きく発展した。この第四紀は約1万年前を境に(1)と(2)に分けられる。(1)は氷河時代とも呼ばれ、この時代は氷期と間氷期を繰り返した。人類はこの中で進化してきたものと考えられており、化石人類の研究では(3)→原人→旧人→(4)の順であったことが知られている。日本で見つかる人骨はいずれも(4)段階のもので、代表的なのは静岡県の浜北人骨や沖縄県の港川人骨が発見されている。(1)に当たる時代は、人類が金属器を知らなかったことから、旧石器時代(考古学上は石器時代)とされている。日本にはこの時代の遺跡は存在しないものと考えられていたが、1946年相沢忠洋によって群馬県の(5)で関東ローム層(旧石器時代の地層)から石器が発見されたことから、日本における旧石器時代の存在が明らかになった。旧石器時代には、石器といっても基本的には石を打ち砕いただけの(6)が用いられており、それらは狩猟などに使われた。この時代は狩猟や採取が中心であったが、そのための道具としてナイフ形石器や(7)を槍の先端につけ、大型動物を捕えていたという。旧石器時代も終わりに近づくと(8)と呼ばれる小型の石器もあらわれている。

氷河時代も終わり、(2)になると地球は温暖になり、今の日本列島の形になっていく。この環境の変化は人類の生活にも大きな変化を与え、縄文文化が成立する。この時代の特徴は中・小型動物の増加によるそれを捕えるための(9)の出現、また石器では砕いただけでなくさらに磨かれた(10)、さらには土器が使われ始めたことにある。この土器は縄文土器と呼ばれ、厚手だが低温で焼かれたので(11)のものが多い。これは貯蔵などを目的に作られたが、この土器や人々が食べた後に捨てたと思われる貝殻などが遺跡から発見されている。この遺跡は(12)と呼ばれ、代表的なものにアメリカ人モースが発見した(13)がある。(12)の近くには(14)という地面を掘りくぼめその上に屋根をかけた住居の跡が見つかっており、青森県(15)では大規模な(14)の集落跡が確認されている。このような住居をもった人々はどのような思想を持っていたのか遺跡の調査から少しわかっている。まず死者の埋葬方法が体を折り曲げた(16)と呼ばれる方法であったことや女性をかたどった(17)や男性の生殖器を表現されたと思われる(18)が作られていたことから、当時の人々は自然物や自然現象に霊威が存在するものと考えていたと思われる。このような思想を(19)という。この他、成人した際には、通過儀礼として(20)がなされていたという。また驚くことに、長野県和田峠など一部からしか産出しない(21)の分布状況から、この時代から交易がおこなわれていたことがわかっている。(21)は石器の原料となったものであり、他にもひすいが例に挙げられる。

1	2	3	4	5
6	7	8	9	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21				

縄文時代末期になると、日本に（１）が伝えられる。そのことは佐賀県の菜畑遺跡などからわかっている。そして紀元前４世紀、（１）を基盤とした弥生文化が成立する。ただ弥生文化は縄文文化とは違い、日本全国に広がったわけではなく、現在の北海道には（２）文化が、南西諸島には（３）文化が成立していた。いずれにせよ、日本列島の大部分では弥生文化が成立し、食料生産が行われた。この文化では、鉄などの（４）が使用された。（１）のための土地開発において弥生時代前期は（５）が主であったが、鉄製農具の出現により、中・後期には（６）の開発も進められた。そして育てられた稲は（７）を使用し、穂首狩りで収穫され、貯蔵された。貯蔵先は弥生土器や貯蔵穴、地面から離れる形で作られた（８）に貯蔵された。この時代は縄文時代と比べて埋葬方法も変化している。死者は集落近くの共同墓地に（９）という方法で埋葬された。また九州北部では朝鮮半島との共通点が見られる墓が現れており、その中でも著名なのは（１０）という地上に大石をおいたものであろう。他にも、方形の墳丘の周りに溝をめぐらせた（１１）や楯築墳丘墓などが確認されている。そのほかこの時代の特徴といえるのは、青銅製祭器の出現であろう。収穫祈願や豊作感謝の祭を行う際に使用されていたと思われるが、この祭器にはいくつか種類がある。まず近畿地方を中心に使用されていた（１２）、瀬戸内を中心に使用されていた平形（１３）、そして九州北部を中心に使用されていた（１４）・銅戈である。この地域区分はそれぞれの地方の遺跡から発掘されていることで証明されているが、遺跡の中でもこれらが大量に出土したのは、島根県の（１５）遺跡で、ここでは銅鐸 6、銅矛 16、銅剣 358 が確認されている。

以上、弥生時代を概観してきたが、この時代には重要な出来事がいくつか起きている。まず弥生時代には収穫高の差などによって、争いが起きていたということである。その証拠に（１６）という濠や土塁を備えた集落が現れている。それぞれの集落はやがて（１７）という政治的なまとまりをもつようになっていった。この状況は中国の書物でも確認されており、前漢の歴史を述べた（１８）では「倭人」の社会は百余国にわかれていると記されている。さらに（１９）では奴国の王が印綬を賜ったことが書かれており、（２０）では邪馬台国の（２１）が女王として国を治めていたこと、さらに 239 年には魏の皇帝に使いを送っていたことも確認されている。尚、邪馬台国の存在場所は二つの説があり、一つは（２２）、もう一つは九州説である。この議論は未だ決着しておらず、はっきりしたことは分かっていない。

1	2	3	4	5
6	7	8	9	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22			

史料1 『漢書』地理志

夫れ（1）海中に倭人有り。分れて百余国と為る。歳時を以て来り献見すと云ふ。

史料2 『後漢書』東夷伝

建武中元二年、倭の奴国、貢を奉じて朝賀す。使人自ら大夫と称す。倭国の極南界なり。

（2）、賜ふに印綬を以てす。

安帝の永初元年、倭の国王帥升等、（3）百六十人を献じ、請見を願ふ。

桓霊の間、倭国大いに乱れ、更相攻伐して歴年主なし。

史料3 「魏志」倭人伝

旧百余国。漢の時朝見する者あり。今、使訳通ずる所三十国。郡より倭に至るには、海岸に循ひて水行し、韓国を歴て、乍は南し乍は東し、その北岸狗邪韓国に到る七千余里。……南、（4）に至る、女王の都する所なり。

其の国、本亦男子を以て王となす。住まること七、八十年。倭国乱れ、相攻伐して年を歴たり。乃ち共に一女子を立てて王と為す。名を卑弥呼と曰ふ。（5）を事とし、能く衆を惑はす。年已に長大なるも、夫婿なし。男弟あり、佐けて国を治む。……

景初二年六月、倭の女王、大夫難升米等を遣し郡に詣り、天子に詣りて朝献せんことを求む。太守劉夏、吏を遣し、将て送りて京都に詣らしむ。

その年十二月、詔書して倭の女王に報じて曰く、「……今汝を以て親魏倭王と為し、（6）紫綬を仮し、……特に汝に……銅鏡百枚……を賜い、……」と。

卑弥呼以て死す。大いに冢を作る。径百余歩、徇葬する者、奴婢百余人。更に男王を立てしも、国中服せず。更々相誅殺し、当時千余人を殺す。また卑弥呼の宗女（7）年十三なるを立てて王と為す。国中遂に定まる。……

1	2	3	4	5
6	7			